



劇症型溶血性レンサ球菌感染症

劇症型溶血性レンサ球菌感染症(streptococcal toxic shock syndrome : STSS)は、感染症法で定められている五類感染症全数把握の対象疾患です。1987年に米国で最初に報告され、日本では1992年に初めての症例が報告されています。症状は四肢の疼痛から始まり数十時間内に急性腎不全、手足の壊死、それに伴うショック、多臓器不全などを併発します。

埼玉県におけるSTSSの報告数は、2021年30人、2022年41人、2023年64人と増加傾向にあり、2024年はすでに68人(2024年23週まで)となっています。2019年から2024年の年齢階級別の患者数と届出時の死亡者数は表のとおりです。届出時死亡率は13%から40%と年によってばらつきがありました(表)。

表 STSSの年齢階級別患者数と届出時死亡者数

	2019	うち死亡	2020	うち死亡	2021	うち死亡	2022	うち死亡	2023	うち死亡	2024	うち死亡
0-9			1						4	1		
10-19												
20-29	1								3			
30-39			1		1	1			8	3	4	
40-49	2	2	2		3		4		6	1	6	1
50-59	6	1	5	1	4		2		7		11	2
60-69	5	2	8	2	4	2	12		12	2	15	3
70-79	7	1	5		10		10	2	11	2	14	4
>80	9	6	8	1	8	1	13	4	13	4	18	3
計	30	12	30	4	30	4	41	6	64	13	68	13
死亡率		40%		13%		13%		15%		20%		19%

2023年11月以降、A群溶レン菌によるSTSSの届出数の増加が認められており、2023年は患者64人中41人(64.1%)、2024年(23週まで)は患者68人中47人(69.1%)がA群によるSTSSと診断されています(図1~3)。

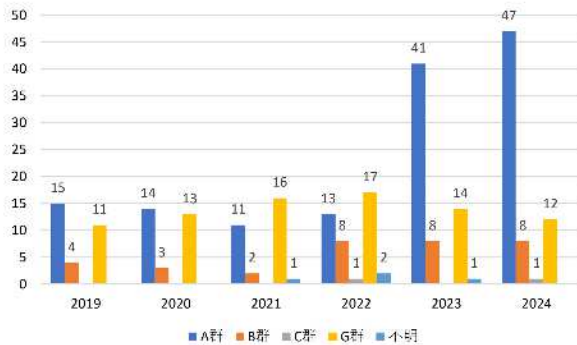


図1 血清群別届出数

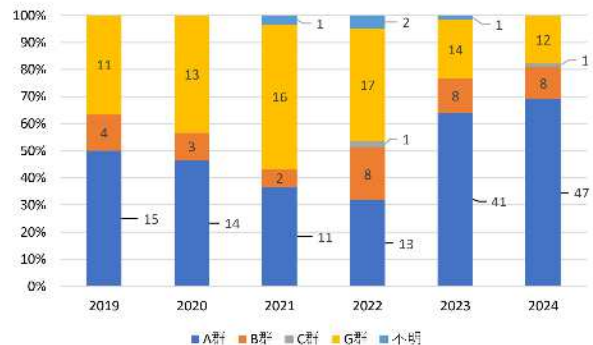


図2 血清群別届出割合

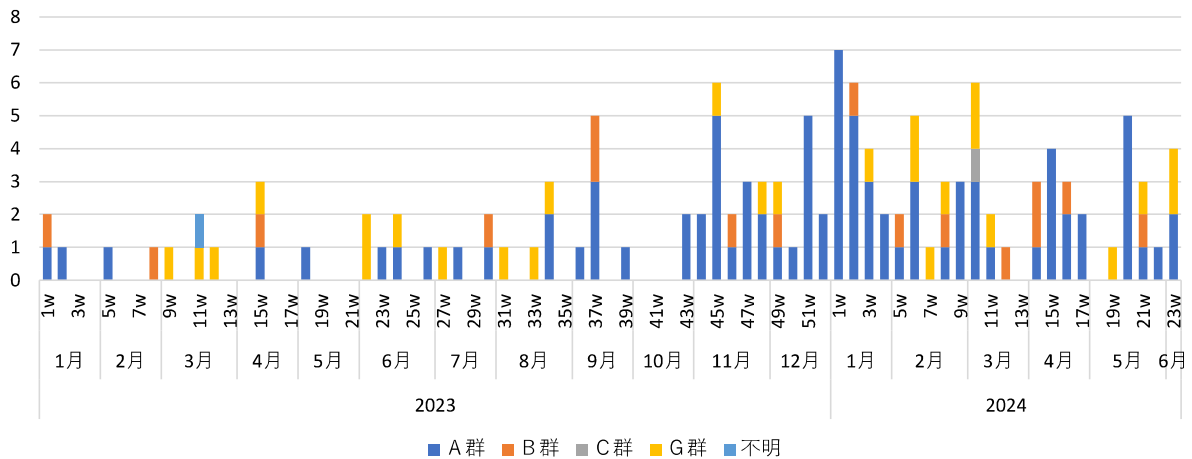


図3 劇症型溶血性レンサ球菌感染症届出数（診断週別 2023年1週～2024年23週）

A群溶レン菌の一種に発赤毒素の産生量が多いとされる M1_{UK} 株があり、分離頻度が増加しているとの報告があります。当所では、医療機関から分与された STSS 患者由来の菌株の遺伝子型別を行っており、2023 年以降、A 群溶レン菌を原因とする STSS 患者から 17 株が分離されています。2019 年から 2022 年までは症例数が少なく分与株数も少ないため比較は困難ですが、M1_{UK} 株は分離されていませんでした。図 4 は当所で STSS 患者由来の菌株の遺伝子型別を行った結果を診断月別に示したものです（2024 年 5 月 31 日現在）。患者発生が増加した 11 月以降、M1_{UK} 株が 15 株、M1_{UK} 以外の株が 17 株という結果でした。

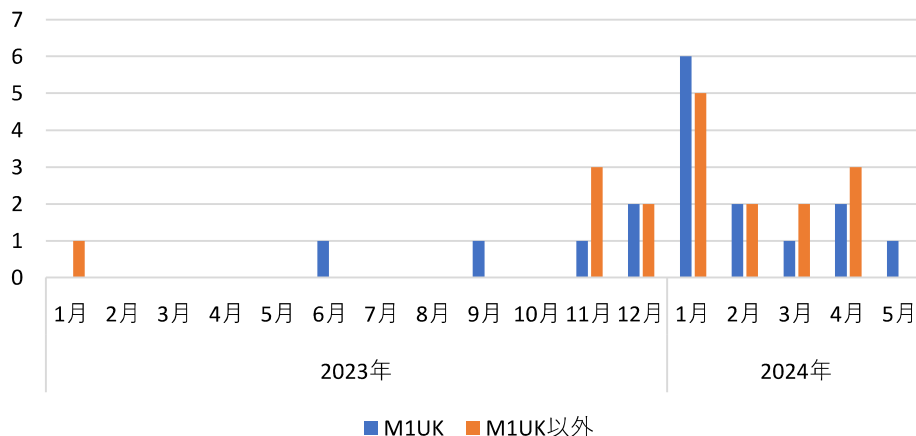


図4 埼玉県衛生研究所における A 群溶レン菌の遺伝子型別検出状況（n = 35）
（2024 年 5 月 31 日現在）

溶レン菌は常在菌で、無症状で咽頭に保菌している場合もあり、感染から STSS 発症の過程がはっきりしておらず、患者数増加の原因は明らかではありません。小児科定点把握疾患である A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎の流行と STSS 患者の増加は、同じような動向を示しています。咽頭炎患者の増加が STSS 増加の原因の可能性もありますが、因果関係ははっきりしておらず、今後もその動向に注意が必要です。

STSS と診断した場合には、速やかに発生届を提出し、患者情報の収集にご協力いただきますようお願いいたします。